

みなさんは、「アクティ
ブ・ラーニング（AL）」
という言葉を目にしたこと
があるだろうか。

教員による一方向的な講
義形式とは異なり、学生の
能動的な学習を促すALに
は、教室内のディベート、
グループワーク、実験だけ
でなく、教室外の実習やフ
ールドワークなども含
む。また、ALによって、
学習内容の定着率も高くな
ると言われており、教育現
場だけでなく、企業研修に
おいても、積極的に活用さ
れている。

ALの一つに、「プロジ
ェクト（プロブレム）・ペ

アクティブ・ラーニングの課題

最近では、学生のアイデア
による新商品開発や地域活
性化など、企業や自治体な
どの連携に基づくPBL
が、多くの大学で取り組ま
れている。

本学においても、産学連
携を通じてPBLを活発に
実施しており、私もいくつ
かのプロジェクトに携わっ
てきた。それらの活動に対
する調査を通じて、ALや
PBLの利点だけでなく、
課題も浮き彫りになってい
る。

第一は、チーム編成の問
題である。基本的に、AL
やPBLは少人数グループ
で実施されることが多い。
グループワークの問題の一
つは、フリーライダー（た
だ乗り）である。すなわち、
活動にはあまり協力せず
に、成果だけ手に入れよう

貢献度が低いメンバーがい
る場合は言うまでもない
が、チームに対する貢献欲
求の高低やその内容がメン
バーによってバラバラであ
れば、チームは途中で空中
分解しかねない。

第二は、教員や第三者の
関与の問題である。メンバ
ーのチームに対する貢献度
の高さは、個人の能力向上
に対しても影響を与えてい
た。

あるチームの場合、チー
ムへの貢献度が高いと自覚
している学生ほど、「まわり
に働きかける力」や「自分の
意見を相手に伝える力」な
どが向上したと自己評価し
ていた。逆に、チームへの貢
献度のバラつきが期間内で
大きいほど、それらの能力
はあまり発揮できなかった
と認識していた。しかし、
貢献度のバラつきの大きさ
は、「新しいアイデアを考
える力」の向上をもたらし
ていることもわかった。

つまり、安定的にチーム
に貢献し続けることによっ
て発揮される能力もあれ
ば、チームへの貢献の波が
大きいほど、自覚される能
力もあると言える。チーム
の置かれている状態や目指
す目標によっては、教員や
第三者が積極的に関わって
チームの安定化を図った
り、逆に、揺さぶりをかけ
たりすることが求められよ
う。

なお、ALやPBLにお
ける詳細な調査は継続中
あり、その分析結果は別の
機会で紹介することにした
い。

チーム編成、教員や 第三者の関与が必要

ースド・ラーニング（PB
L）」がある。PBLは、
プロジェクト型学習や問題
解決型学習とも称される。



名古屋市立大学大学院
経済学研究科准教授

下野 由貴

とする学生の存在である。
今回の調査では、最終的
な成果が高く評価されたチ
ームの特徴として、チーム
を構成するメンバーの貢献
度のパターンが類似してい
ることがわかった。すなわ
ち、「チームに対して、い
つ、何に対して、どのよう
に貢献したいのか」という
貢献欲求が似ているメンバ
ーで構成されたチームのパ
フォーマンスが高かった。
チーム編成を考える上で、
フリーライダーのように貢

しもの よしたか 経営戦略論
・経営組織論。神戸大学大学院経
営学研究科博士後期課程修了。博
士（経営学）。1974年生まれ。

